

Title	トーマス・イ・エニス著 印度支那におけるフランスの政策と発展 : Thomas E. Ennis, French Policy and Developments in Indochina, 1936
Sub Title	
Author	下田, 博
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.5 (1940. 5) ,p.731(125)- 737(131)
JaLC DOI	10.14991/001.19400501-0113
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400501-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を掲げてゐる。

本書は、「解説」と題されてゐるけれども、實際は、解説と批判の中間書と云ふ方が一層内容に相應しい。單なる解説書であるならば、もう少し原著に忠實に、一般に理解され易いやうに書かれるべきであり、若し批判書であるならば、より多くの批判文獻に接すべきであつた。この孰れもが充分満足されてゐない。殊に筆者は本書の一部分、「所得、投資、貯蓄」の章を原著や他の文獻と比較しつゝ精讀して、このやうな觀を抱かざるを得なかつたのである。然しこの故に本書を輕視しようとするのではない。解説と批判の中間書としては、その大いなる價值を認めない譯には行かぬ。特に問題の中心點の把握、推理の正確さ、ケインズ理論に對する正しい認識等は、本書の誇りとする所であらう。このやうな書は、中山博士の如き優れた師を中心として、多數のケインズ研究者の討論を俟つて初めて出現するものであらう。博士の云はれるやうに、「學生の時期の讀書程、虚心に純粹に行はれるものはない。ケインズについては正に無數の論議が闘はれてゐる。それ故にこそ、却つてこれに囚はれざる純粹の讀書記録が必要であり、その意味においてこの解説に存在價值がある」のである。本書は解説の點においても、批判の點においても幾多不完全な箇所が見受けられる。然しこれは學生諸君の手になれるものである以上、止むを得ない。否、反對に學生諸君の手によつて完成されたものとして、これ程優れた書は未だ會つて現はれなかつたであらう。しかも本書によつて、難解なケインズ理論の手引が與へられたことは、理論經濟學界における大きな喜びである。我々は最大な讃辭を、巽、大島、深田、兒玉の四君に與へ、最大の感謝をこれ等の指導に當られた中山博士に捧げる。これに助けられて、我國におけるケインズ研究が一層廣く深く進められ、これに刺戟されて、多くの學生諸君の研究熱が種々の方面で一段と發揮されんことを切望する次第である。

トーマス・イ・エニス著「印度支那におけるフランスの政策と發展」

—Thomas E. Ennis, French Policy and Developments in Indochina, 1936—

下 田 博

ナポレオン・ボナパルトによつて「眠れる獅子」と呼ばれ、而して凡そ前世紀の央頃まで昏々と深き眠りを續けてゐた支那に對し、かの阿片戰爭を轉機として、歐米列強の侵略の火蓋がきられたるとき、フランスの對支經略は、大體、印度支那を中心に、その附近に勢力前進據點を求めつゝ、主として南支における權益確保を目標として遂行せられたのである。

誠に、佛領印度支那こそは、フランスの支那、就中、南支攻略の據點であり、またそれゆゑにこそ 今次日支事變においても、これに火のつくことを何よりも恐れたるフランスは、西北赤色援蔣ルートと共に、西南援蔣ルートの一翼として、その先端に立てるイギリスの援蔣政策に便乗し、わが打倒蔣政權・東亞新體制建設のための聖戰の矛を遮つたのである。

然らば、一體、佛領印度支那とは如何なるところであるか。

佛領印度支那は、印度支那半島の東半を占め、フランスの植民地たる交趾支那、その保護領たるトンキン、安南、

ラオス及びカムボヂヤ、並びに租借地たる廣州灣を包含し、北は廣東、廣西及び雲南の支那諸省に接し、西北隅はビルマ、西はシャムに續き、西南はシャム灣、東はトンキン灣及び支那海に臨み、總面積凡そ七十四萬一千六百平方浬、人口總數大約二千三百二十四萬一千を有する。

これを各地方別にみれば次ぎの如くである。

	面積	人口	一平方浬當り人口
交趾支那	六四、七〇〇	四、六一六(内ヨーロッパ人一五、四四九)	七一
トンキン	一一五、七〇〇	八、七〇〇(同)	七五
安南	一四七、六〇〇	五、六五六(同)	三八
ラオス	二三一、四〇〇	一、〇一二(同)	四
カムボヂヤ	一八一、〇〇〇	三、〇四六(同)	一七
廣州灣	一、二〇〇	二二一(同)	一七五
合計	七四一、六〇〇	二三、二四一(同)	三一

右の表の示す如く、これらのうち、まづ、ラオスは面積最も廣大なる割合に人口最も稀薄にして、安南と共に經濟的開發の餘地を多分に殘せるところであり、また交趾支那は印度支那半島隨一の沃土にして、その産するサイゴン米は世界に名高く、然もカムボヂヤの米及び胡椒並びに廣州灣の米・胡椒及び海産物等と擧げ來らば、これらの地方における資源の豊富なる、誠にフランスの一大寶庫たるの名を辱づかしめぬものといつてさしつかへなく、而してまた印度支那半島の東北隅に位して支那と境を接せるトンキンはこれら一植民地、一租借地及び四保護領を以

て組織す「印度支那聯邦」の中央政府の所在地たるハノイを始め交通の要點たるハイフォン等の重要諸都市を擁し、全佛領を睥睨しつゝ、更にフランスの對支勢力前進據點として重要な役割を果しつゝある。

いま、こゝに紹介する本書の著者ウエスト・ヴァージニア大學史學科助教授トーマス・イ・エニスは、このフランスにとつて政治的經濟的軍事的に頗る重要な意義をもつ佛領印度支那を祖上にのぼせ、全卷二百三十頁、全八章のうち、先づ前の五章に互つてフランスの印度支那經略の歴史を敘し、第六章において現在の佛領印度支那の經濟事情を述べ、而して第七章において印度支那におけるフランスの社會的諸施設——醫療施設、勞働統制及び教育施設等——を概観してゐるが、是等の諸章を通じて、著者が特に云はんとするところは何であるか。

著者は、特に、一八五六年第二次阿片戦争を轉機としてフランス資本主義による支那侵略が行はれてから惹起せられたる政治的經濟的社會的諸問題を取り上げつゝ、この間、ヨーロッパの支配に對する印度支那の反抗の本質を究明せんと努むるものである。而して、著者は、このフランス人の支配に對する印度支那土民の反抗の本質的原因を「フランスの同胞的個人主義的哲學」と「印度支那の家長的全點主義的原理」との矛盾に求め、この矛盾から生ずる兩者の軋轢を本書の隨處に展開しつゝ、延いてヨーロッパ的熱帯植民地政策殊にフランスのそれが果して成功せるや否やの問題にまで論及せんとしてゐる。果してそれは成功せるものであらうか。

嘗て一九一六年より同一九九年までイギリスの支那派遣軍に居り、のち一九二四年より同二七年まで燕京大學に歴史を講じ、而して同二七年ベキンの米支通信社支局長たりし著者は、本書の卷末に掲ぐる豊富なる資料と其の現地に關する見聞と相俟つて、本書最終の第八章「印度支那の不安」においてこれに答へんとするのである。

二

著者は云ふ、「同胞平等の感念より發足せるフランスの政治は共和制に依存する。父權主義に驅られたる印度支那の政治は本質的に貴族的である。政治的見地より觀れば、フランスは世俗的であり、印度支那は宗教的である。フランス共和國と異り、印度支那王國は……神聖尊嚴なる皇帝(Dr. Hoang Ho)をば雷だに現世の治者としてのみならず天帝として仰ぐ。西歐人は、洪水に因る凶作を、自然の暴力に基因せしめる。印度支那人は、之を、天命に従ふ可き皇帝及び朝臣の不徳の所爲と做す。斯く考へ來らば、印度支那の民衆はその新たなる支配者たるフランス人の「すべ」らざるを痛感せざるをえない。」

フランスの印度支那統治の問題は、かくて、その政治的社會的經濟的分野における政策の善惡巧拙を超えた問題である。それは民族の問題であり、そのよつて立つべき基本原理の問題である。「凡そ史上如何なる時代と雖も、同胞的(工業的)主義と家長的(農業的)主義との融合せるは嘗てない。兩者の會ふとき、その衝突せるや必定である……今日工業主義と農業主義との激烈なる拮抗は、アメリカ人に對するフィリッピン人の、イギリス人に對するインド人の、而してまたフランス人に對する印度支那人の抗争において正にその頂點に達してゐる。然も「先進」工業國にしてその「後進」農業國における政策が實に自國の存立を免からしむべきを認むるとき、ひとりそのときのみ、専門的に謂ふ所の「帝國主義」なる侵略政策が外交上の切札たることをやめるであらう。」

然も、元來、オランダやイギリスの如く、植民地領有の絶對的必要を持たぬフランスの植民的計畫は、それゆゑに、「商業的強國確立のための凡俗なる勞働に従ふ前に、軍事的帝國設立を目指す名譽と冒險とロマンスとに驅られたるものであつた。」かくして、その植民政策において誠に極端な本國本位主義・完全なる同化政策をとれるフランスは、いはば英國的植民地自治政策をとらんとせるラネッサン(Joseph de Lanessan)やゾレン(Alexander

Varene)の如き印度支那總督を本國に召還し、たゞ偏へに、印度支那舊來の傳統も地方特殊の事情も皆な之れ悉くこれを三色旗の下に歸一し去らんとしたのである。誠に「フランスの政策は植民地の個性を窒息せしむるものである。」

かくてまた佛領印度支那特有の現象はフランス人官吏の過剩にある。一九一〇年、交趾支那には、イギリスが僅々十五人の官吏を以て統治しうべき地域に實に八十六人の高級官吏あるをみた。されば今日佛領印度支那中央豫算の三分の一・地方豫算の二分の一が佛系官吏の維持に支出せられてゐることは怪しむに足りない。而してこれらのフランスの政策に對する土民の不滿乃至反抗を緩和する方策として、土民官吏(Mandarin)の登用と其の待遇條件の改善向上との方針がとられたが、併し唯だ自己の榮達をのみ念願とせる俗吏として若しくはまたフランスに買収せられたる走狗として土民に接すること多きこれらマンダランに對する憤激は懸てフランス本國に對する反抗を激發せしむるにいたり、かくて一般土民大衆の怨嗟と有識士民層の不滿とが茲に民族獨立運動にまで集結するに至れるは蓋し必然の勢といはねばならぬ。

而して、佛領印度支那における民族運動は、著者も記せるがごとく、第十九世紀末葉より第二十世紀初頭にかけて、日露戦争における日本の戦勝に因る有色民族の覺醒奮起を轉機として燎原の野火の如く燃え擴がるにいたり、次いでまた支那・印度・フィリッピン及びエヂプト等の革命運動乃至獨立運動の勃發・成功等は佛領印度支那就中安南の民族運動に甚大なる影響を及ぼせるものであつた。

然も、第一次ヨーロッパ大戦に際し、嘗て彼等の救世主を以て自任せる歐米列強相互間における抗争殺戮を目撃せる彼等は、茲に、偽善的な白人的支配に對する全面的不信を抱懷するに至つたのである。然もまた、この第一次

大戦を契機としてアジア大陸政策遂行を計れるわが國は、ワシントン會議によつて大陸よりの後退を餘儀ならしめられるとともに、國內的關心が寧ろ政黨政治に集中せることによつて國際政治的關心の稀薄をきたしたのである。而して、その間、一九一七年、ロシア共産黨は、政權を復得し、次第に反革命運動を抑壓して、プロレタリア獨裁を確立したが、このロシア革命の成功はこゝに叙上の民族運動と共産主義運動との聯繫提携を生むに至つて「印度支那の坩堝を沸騰」せしめたのである。

而して、これらの諸段階における民族運動を論述せる著者は、結局、印度支那人の希望達成の成否如何を以て印度及び支那の動向如何と密接不離の關係にあるものとなし、かくて結論していふ「印度支那より遙かに根強き民族的哲學を有する、是等兩國こそ、その南方隣國のとるべき途を決定するのであらう。」と。

三

誠に、それは一印度支那のみの問題ではない。印度をも支那をも含めた實に東亞の問題として取り上げられなければならない。然も、わたくしを以て觀れば、印度支那に就いて觀ても、これに對する赤色の乃至白人的政策は、「印度支那人の印度支那」建設を標榜せる彼等の民族運動と相容れるものでは斷じてない。それらは皆なこれ、彼等を解放する代りに、これを窒息せしむるものである。それは眞に東亞民族の解放獨立を主張するわが方策を去ること頗る遠いものといはねばならぬ。實に、東亞の解放と獨立との達成實現は、わが日本を措いて他に絶対に求むべくもないし、またそれゆゑにこそ、いまや東亞の盟主として東亞新體制創設の聖業に邁進しつゝあるわれわれの責務たるや重且つ大であるといはねばならぬ。

わたくしは、こゝに、著者の引用せる、一九〇五年安南學生の手に成れる、誠に種々の示唆に富む、書翰及びパンフレットの一節を掲げて本書紹介の筆を擱きたいと思ふ。

「フランス人は予の持てる總てを予から奪つた。彼等は予の家族を苦しめること甚しきものがある。賢明なる全安南人は須く予のなせるが如くなすべきである。彼等は日本においてこそ多數の同胞により心から歡迎せられるであらうし、フランス人よりも賢きこと限りなき、われわれの兄弟たる日本人によつてこそ又た悉く皆な親切にあらはれる。」

「……一切の權力、一切の利益は擧げて碧眼紅毛の西戎北狄たる支配者の掌中にある。而して、われら、黄色人種は、暴力を以て破壊せられ、全く衰頹に瀕せしめられつゝある。友邦をうるためには、わが民族の代表者に依頼することが必要である。予は、貴下の賤しき従僕たり、名もなき一學徒ながら、新著書新學説を學ぶ機會を持つにおよび、日本の近代史において彼等が能く無力のヨーロッパ人を征服し得た所を見出した。われわれが一結社を結成せる所以はこゝにある……われわれは安南の青年中最も元氣旺盛、最も勇氣凛々たる者を選んで、日本に留學せしめんとするものである……フランス人に此の運動を氣づかれずに數年を経過した。これわれわれがわれわれの勢力を増大し得た所以である。現在日本における印度支那留學生は凡そ六百人許り居る。われわれの唯一の目的は其の將來の増加を準備するにある……貴下は貴下の地方に斯様な目的のために何等かの結社を結成せられたか。」

——一九四〇・四・二三——